

Title	アラビア語を母語とする日本語学習者の自動詞・他動詞の選択について
Author(s)	エルハディディ, アブデルラフマーン
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 194-203
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69228
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アラビア語を母語とする日本語学習者の自動詞・他動詞の選択について

エルハディディ アブデルラフマーン

1. はじめに

日本語では骨折したとき「足を折った」と他動詞を用いて表現する。しかし、アラビア語母語話者の筆者にとってこの文は理解に苦しむものであり、自分の意思で折っていないため、どうしても「足が折れた」と自動詞で言いたくなる。このように筆者自身の学習経験および日本語教師としての経験から、アラビア語を母語とする日本語学習者のための「自動詞・他動詞」（以後「自他」）の研究の必要性を感じた。日本語の自他は、アラビア語母語話者の学習者にとって、上級になってもなかなか上手に使えない、習得困難な文法項目である。例えば、「論文のテーマが決まった」という文は自分の意思による動作であるため、上級の学習者でも「論文のテーマを決めた」と言いたくなる。自他を学習する際の困難な点や、学習者の誤用については小林（1996）、石川（1991）、稲葉（2004）、森田（2004）、張（2009）市川（2014）など様々な研究が行われてきた。小林（1996）はスル／ナルを選び間違えても意味が通じるなら許されるかという点について言及しており、場合によっては、学習者と母語話者それぞれが選んだ表現と反対の表現に不快感、不信感が残り、相手の文化の評価にまで至る可能性もあると指摘している。

2. 先行研究

母語転移についてLado（1952）は我々は、外国語を学習する際に母語や母文化で用いられる形式や意味、あるいはそれらが用いられる範囲を、外国語や外国の文化に転移させる傾向にあると指摘している。

また英語、中国語における自他と日本語における自他の対照研究や第一言語転移をめぐる研究が石川（1991）、角田（1991）、森田（2004）、張（2009）、望月（2007）などにおいて数多くなされてきた。

石川（1991）は相対自動詞・他動詞のない言語（英語や中国語など）を指して、相対自・他動詞は学習者の母語で語として区別されておらず、日本語を学習する上でその区別と用法について習っていなければ自他の選択を間違えると指摘している。

英語を母語とする日本語学習者が日本語の自動詞より他動詞のほうを上手に使えるのは、英語母語話者は母語において自動詞より他動詞のほうを使い慣れているからであることが明らかになっている（森田：2004）。また、中国語には自他の区別がなく、中国語母語話者の学習者が日本語の自他を学習する際には、動詞の形態から自他の区別を認識する

わけではないため、その理解が困難であることも明らかになっている（羅菲・市瀬：2011）。

以上の先行研究では英語、中国語を母語とする日本語学習者における母語転移が明らかになっている。しかし、日本語の自他とそれに相当するアラビア語の自他の対照研究やアラビア語からの言語転移をめぐる先行研究は筆者の管見の限りハッサン（2011）のみである。

ハッサン（2011）は、日本語とアラビア語における自他について少し触れ、アラビア語では受け身と自動詞をそれぞれ別の語彙で表すのに対し、エジプトアラビア語（エジプト方言）では1つの語彙で両方の意味を表すことができると述べている。

従来盛んに研究されてきた中国語と英語の自他については、もともと自他の区別がないものであり、アラビア語のそれとは全く異なる。アラビア語のように自他の区別がある言語を母語とする学習者における、自他の習得過程を明らかにすることが重要であると考える。

3. 日本語とアラビア語における自動詞と他動詞

3.1 日本語における自動詞と他動詞

寺村（1982）は自動詞、他動詞を、「死ぬ」、「歩く」などのような「絶対自動詞」、「殺す」、「切る」などのような「絶対他動詞」、「閉める」、「閉まる」などのような「対のある自・他動詞」¹、「閉じる」、「開く」のような「両用動詞」の4つの種類に分けた。寺村は日本語には対のある自他が非常に多く、両用動詞は非常に少ないと指摘している。

3.2 アラビア語における自動詞と他動詞

アラビア語で自動詞と見なされる動詞は、目的語を必要としない動詞、あるいは動詞と目的語の間に前置詞を必要とする動詞のことである。アラビア語では自動詞から他動詞が派生、または、他動詞から自動詞が派生するという体系をもち、結果的に日本語のように、形態的に似通っている対を持つ自動詞、他動詞が多い。例えば、【kharaja】（出る）という自動詞にA（ハムザ）²をつけることで他動詞の【Akhraja】（出す）になる。

4. 調査

本調査では、日本語の自他は、①アラビア語を母語とする日本語学習者（本調査ではエジプト人に限定する）にとってどのような点で難しいか、②①で挙げられた難しい点は母語干渉によるものなのか、そして母語干渉を受けやすい表現はどのようなものか、③日本語能力が上達するにつれて、学習者の日本語の自動詞、他動詞の誤用（①②）はどのように変化するか、以上の3点を研究課題とし、2016年2月に調査を行った。そして、回答を元に学習者の誤用を分析し、第一言語の影響の諸相を考察した。

4.1 調査の対象者

カイロ大学、アインシャムス大学、ミスル大学、国際交流基金カイロ日本文化センター(JF)のアラビア語を母語とする日本語学習者、あわせて110人を対象とした。その内訳は2年生レベル(便宜上、初級と呼ぶⁱⁱⁱ)の学習者が53人(みんなの日本語初級終了)、3年生レベル(中級)の学習者が21人、4年生レベル(上級)の学習者が36人である。

4.2 調査の概要

アラビア語母語話者日本語学習者の誤用が多く見られると推察される問題を設定した。具体的には、先行研究(守屋:1994)を参考に学習者に格助詞「が、を」と「自動詞、他動詞」を同時に選択させる方法を用いた(稿末資料参照)。「が」「を」があれば、自他選択の手がかりになってしまうが、それらも学習者に選択させることにより、より自他への理解が測れると考えたためである。対のある自他を混同していないかについて調査するため、選んだ理由や、自動詞のつもりで選んだか他動詞のつもりで選んだかについても書くように依頼した。JFの学習者以外はフォローアップインタビューを行った(JFの学習者は社会人が多く忙しいため)。フォローアップインタビューの内容は、選択した理由、自動詞・他動詞の難しさ、についてである。

5. 調査の結果と考察

本研究では学習者の回答を分析し、以下のことがあきらかになった。

5.1 対のある自他の混同

学習者の回答には、対のある自他の混同が多く見られた(表1)。自動詞の形を他動詞のつもりで選ぶ、あるいは他動詞の形を自動詞のつもりで選ぶという誤用が多く、学習者に見られた。つまり、多くの学習者がそれぞれの文脈で自動詞を使うべきか、他動詞を使うべきかを知っているにもかかわらず、自他の形を間違えて選択することがフォローアップインタビューや学習者のコメントから明らかになった。

表1 初級の学習者における自他の混同(N=53)

問題	動詞	混同者数	混同率
1	「伸びる、伸ばす」	23	43.40%
11	「並ぶ、並べる」	21	39.62%
4	「焼ける、焼く」	20	37.74%
9	「変わる、変える」	17	32.08%
17	「落ちる、落とす」	16	30.19%
10	「治る、治す」	16	30.19%
25	「開く、開ける」	14	26.42%
3	「売れる、売る」	11	20.75%
7	「温まる、温める」	11	20.75%
13	「壊れる、壊す」	11	20.75%
14	「割る、割れる」	11	20.75%
5	「閉まる、閉める」	10	18.87%
2	「始まる、始める」	9	16.98%
21	「届く、届ける」	9	16.98%

5.1.1 自他の混同の要因：

自動詞を選択したいのに他動詞を選んでしまう、あるいは、他動詞を選択したいのに自動詞を選択してしまうことの背景にはいくつかの要因があることが本調査で分かった。その要因を以下にまとめる。

- ① 形が似ていること。対のある自他は形が似ているため、動詞自体を覚えたとしてもどちらが自動詞でどちらが他動詞なのか混乱してしまう。しかも覚えるためのルールがないため、学習者にとってはさらに覚えにくい。

このように自他の形を覚えるためのルールがなく、学習者の自他を含め、日本語の単語のレパートリーが限られているため、学習者が自動詞の共通性と他動詞の共通性を見つけて、学習者各々が自他の形を判断する独自のルールを作っていることが、インタビューやコメントから明らかになった。例えば以下のルールが多く学習者に共通している。

- 1) 学習者が「動詞「ます形」の「ます」の前の音が「e」であれば自動詞の可能性が高い（例：出る、汚れる）
- 2) 「ます形」の「ます」の前の音が「ki」であれば自動詞。（例：届く、開く）
- 3) 「ます形」の前に「ri」の音であれば、自動詞。（例：上がる、集まる）

以上の3つのルール以外にも、「ます形」の「ます」の前に「shi」の音があれば自動詞だと判断を下すことが15人の学習者に共通している。

しかし、以上のルールは適用できる場合と適用できない場合がある。例えば、「入れる、入る」のペアはルール3を適応すれば、問題はないが、ルール1を適応すれば、混同が起きてしまう。このように、学習者自身が作ったルールがあっても、動詞によっては、一見複数のルールが適用できるために、自動詞か他動詞か判定できずに混同が起きてしまう場合がある。

以上のことから、学習者は対のある自他をペアとして覚えるのではなく、自動詞の共通点、他動詞の共通点を各々で見つけ、そのルールに則って自他の判断を下すのである。ここで自他の混同の二つ目の要因を示す。

- ② 対のある自他を別々に習うことが多い。例えば、初級レベルにおいてエジプトでよく使われる『みんなの日本語』を見ると、「焼ける、焼く」のペアの場合、自動詞の『焼ける』は39課で、他動詞『焼く』は46課で学習する。また「変わる、変える」のペアの場合、他動詞の「変える」23課で、自動詞の「変わる」は35課で学習する。その結果、①で論じたように学習者が対のある自他をペアとして覚えるのではなく、自分なりに自動詞の共通点、他動詞の共通点を見つけて自他動詞をそれぞれ覚え、結果混同の原因になる。

5.1.2 自他の混同の変化

学習者のレベルが上がるとともに、学習者の混同の誤用がいろいろなパターンに変化していく。ここで学習者の誤用の変化の中で一番多いパターンについて述べる。今回の調査

協力者の結果を学年別に分析したところ、図1のように中級で誤用が増加した後、上級で減少するという傾向を示した。これは何を意味しているのだろうか。学習者へのインタビュー結果も踏まえて解釈すると、以下のようなになる。

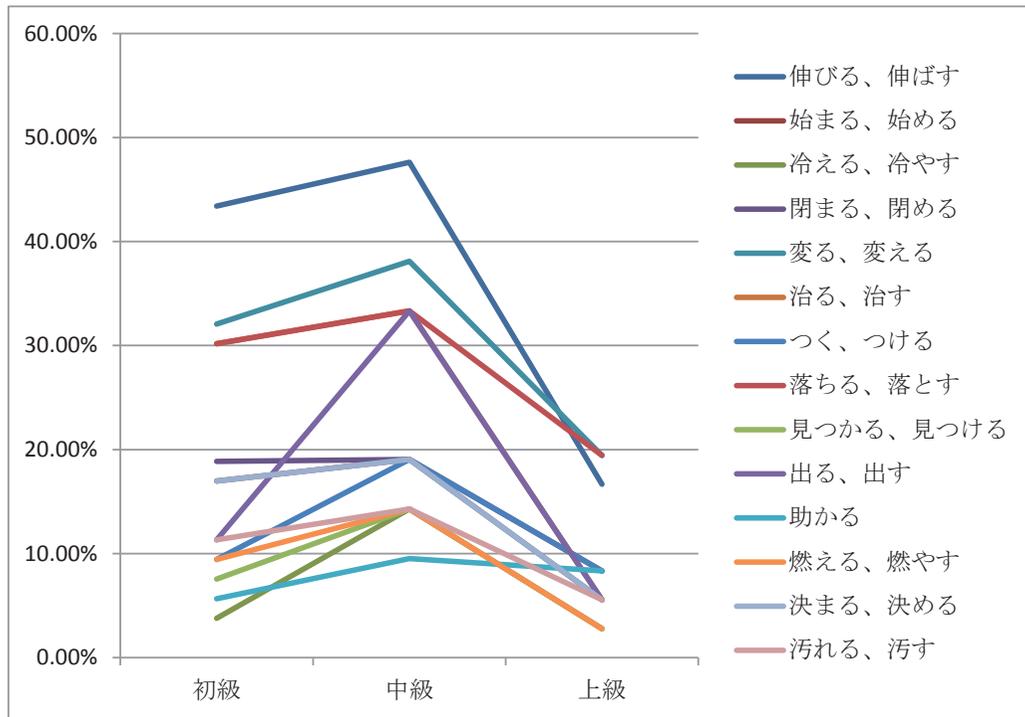


図1 自他の混同の変化

学習者のレベルが上がるにつれ、自他を含めて日本語のレパートリーが豊かになり、学習者が自他を別々の動詞としてではなく、ペアとして学習していく。これは初級との大きな違いである。初級では自他をペアとして認識していない傾向があり、あくまでも自動詞の共通点と他動詞の共通点それぞれを元に判断を下しているため、例外については対応できず、自分が作るルールもうまく行かないことが多い。しかし、上級になると、ペアとして覚えるようになるため、例えば「冷える、冷やす」をペアとして覚えると、後で「燃える、燃やす」がでてきたとき、別々の動詞としてみるのではなく、ペアとして見て、「冷える、冷やす」と同じパターンだと気づき、後でそれに似たようなペアを見たときも、どちらが自動詞でどちらが他動詞かすぐに分かる。このことから、自他を教える際に、ある段階でペアとして教えるほうが効率的なのではないかと考えられる。それによって、自他を別々の動詞として覚える負担が減り、ペアの共通点を見つけやすくなると考えられる。

5.2 日本語とアラビア語における使用状況と自他の選択傾向

両言語における自他の使用状況が異なることにより、自他を選択するにあたり、日本語母語話者が選択するものと違うものを選択することがある。それを以下のように2種類に分けて考察する。

5.2.1 日本語で他動詞を使用するが、アラビア語で自動詞を使用するもの

日本語では「財布を落とす」などの失敗を表す表現を他動詞で表すことがある。調査では「お腹を壊す、壊れる」、「病気をする、なる」、「足の骨を折る、折れる」、「財布を落とす、落ちる」という問題では自動詞表現の選択が多く見られた(図2参照)。いずれの問題でも失敗あるいは責任という概念が共通している。この場合、日本語では他動詞が多く用いられ、自分の失敗、あるいはある人の失敗を表す(石川:1991)。しかし、アラビア語においてはこの場合、自動詞が用いられる。特に病気や怪我の場合は他動詞を使わない。

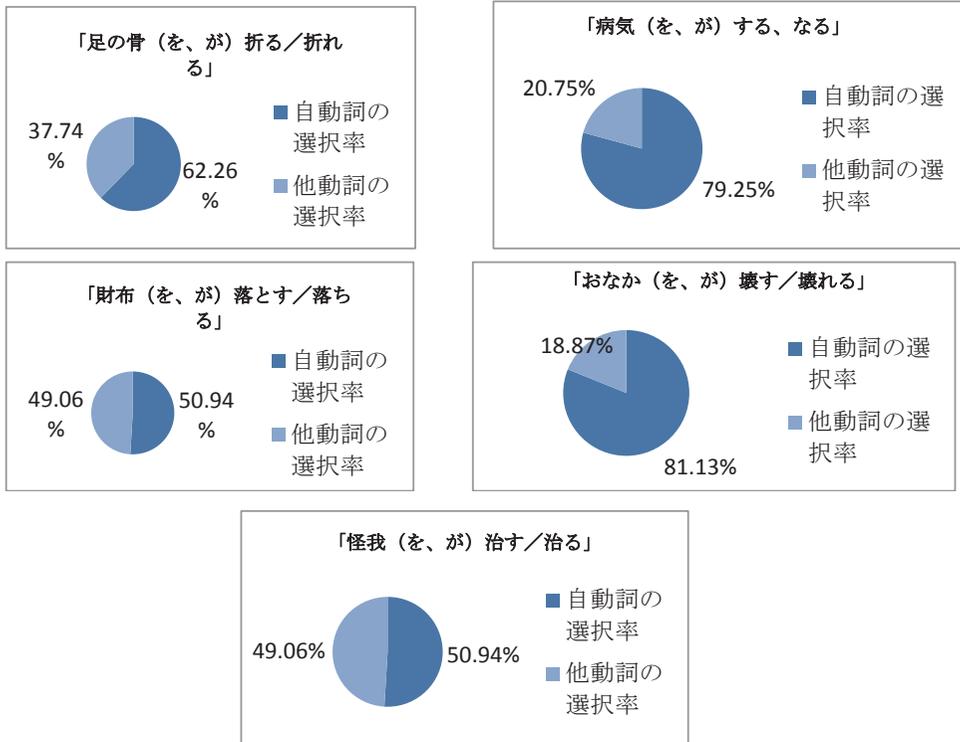


図2 初級学習者の自他の選択傾向

まず「お腹を壊す」の問題の場合、自動詞を選択したのは学習者の8割以上と非常に高い。アラビア語においてこのような表現はなく、お腹が痛くなったという結果を重視している。例えばこの例だと、【*ladaya alam fi batni*】(お腹に痛みがある)のように自動詞的な表現が用いられる。あるいは【*batni tolemoni*】(お腹が私を痛めている)というお腹が目的語ではなく、動作主であり、自分は動作主ではなく対象語である。

「足を折る」の場合も、同様であり、【*inkasarat kadami*】(足が折れた)という自動詞または【*kusirat kadami*】(足が折られた)という受身で表現する。受身を選択肢に入れると、他動詞の形の手がかりになるため、本調査では受身を対象外としたが、受身を入れるとどうなるか興味深い。特にエジプト方言では標準アラビア語(フスハ)と違って、受身も自動詞も同じ形で表現する。

「病気をする」という問題に関して、アラビア語では「病気をする」という表現がなく、【yosbeho maridan】(病気になる)あるいは英語の(sicken)のような動詞【marida】で表現する。筆者はこの問題を作成するとき、「病気になる」という日本語でもアラビア語でも使える表現を避けるために、選択肢に「を、に」を用いず「を、が」のままにした(稿末資料参照3)。それは、アラビア語母語話者にとって、「病気をする」という表現はどの程度馴染みのない表現なのかを確認するためである。予想した通り、学習者は(病気がする)あるいは(病気がなる)を回答しており、(病気をする)という表現を避けていた。結果的に、79%の学習者が(病気をする)以外の自動詞的な表現を選択した。

「財布を落とす、落ちる」の問題の場合、アラビア語では【askatu almehfaza】、(財布を落とした)も、【sakatat almehfaza】(財布が落ちた)も言えるという点で以上の例とは少し異なる。これは言語的には両方の言い方があるが、実際には自動詞の(落ちる)で表現するほうが多い。特に自動詞の表現では【minni】(私のせいで)をつけると、責任の所在が自分にあるということや残念な気持ちを表すことができる。ここで日本語とアラビア語の違いがはっきり見え、石川(1991)が指摘しているように、日本語では他動詞を使うことで責任あるいは失敗を表すが、アラビア語ではこの文脈で他動詞を使うと、自分の意思でわざと落としたという逆の意味になる。そのため、学習者は自分の意思で財布を落としたわけではないだろうと考え、5割以上の学習者が自動詞を選択した。

「怪我(を、が)(治す、治る)ために一ヶ月病院に通った」の問題では5割以上の学習者が自動詞を選択している。学習者の母語であるアラビア語では日本語の(治す)を二つの動詞で表現できる。【'alaja】と【shafa】である。前者の動作主はほとんど医者であり、後者はアッラー(神様)である。文には上のような主語がないと他動詞を選択しにくいと思われる。アラビア語では自動詞の(治る)という意味の【ta'alaja】または受身の【shufeya】(アッラーに治された)のほうがよく使用される。また、エジプトで日本語教材としてよく使われている教科書『みんなの日本語』では第20課で(治す)ではなく(自転車直す)の(直す)を学習し、32課で(病気が治る)の(治る)を学習する。学習者の母語の背景と教材の動詞の教え方が重なり、学習者にとって「治る」が選択しやすくなったと考えられる。それにもかかわらず、他動詞を選択した学習者は5割に近い。それは、文には(ために)があるからだと考えられる(稿末資料参照4)。他動詞を選択した学習者でも動作主は医者でも神様でもないのはおかしいと思いながら、文に(ために)があるため、他動詞を選択したという学習者が少なくなかった。

5.2.2 日本語で自動詞を使用するが、アラビア語で他動詞を使用するもの

事態の成立に注目する表現は①と逆で、日本語において、自動詞が用いられ、アラビア語において他動詞が用いられる動詞である。調査では「論文のテーマを決める、決まる」、「電話をかける、電話がかかる」、「結婚することにした、結婚することになった」、「探していた本、見つける、見つかる」という問題に関する誤用も多く見られた。いずれの問題

も事態の成立に注目する表現である（守屋：1994）。

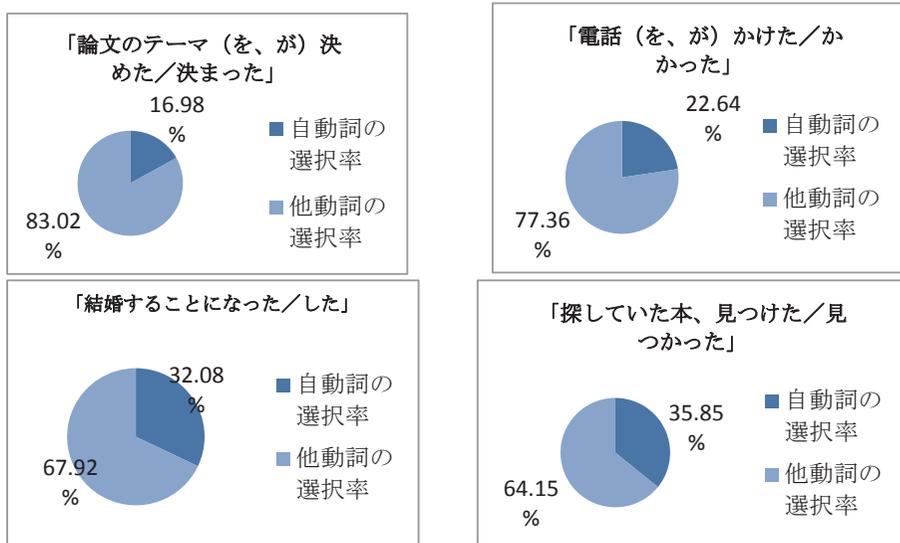


図3 初級学習者の自他の選択傾向 (N=53)

まず、「論文のテーマが決まる」では、アラビア語では自動詞で表現できないことはないが、他動詞の「決める」で表現するほうがより自然でよく使用されている。「結婚することにした、結婚することになった」という問題も同様である。特に（決まる、決める）に関しては、自分自身に関するものであれば、他動詞の（決める）を使用しやすい。アラビア語の視点から考えれば、論文のテーマも結婚も話し手の意志によるものであるため、8割以上が他動詞の（決める）、また6割以上が他動詞的表現である（ことにする）を選択したと考えられる。

「電話をかける、電話がかかる」という問題の場合、学習者の7割以上が他動詞を選択している。この表現はアラビア語で【honaaka shakhsun etasala beka】（あなたにだれかが電話をかけたよ）のように表現する。あるいは【jaa laka etesalan】（あなたに電話が来ました）と表現する。アラビア語には（電話する）という意味の動詞には、自動詞【yatase lu】しかなく、また動作主には人間しか取ることが出来ない。そのため学習者は（電話がかかる）という、動作主が（電話）である表現を使わず、（電話をかける）という、動作主が人間である表現を選んだと考えられる。また「さっき3回もあなたに電話（が、を）（かけて、かかって）きましたよ」の文における動作主は話し手である（私）だと思い込み、他動詞を選んだ学習者が何人もいた。

「探していた本、見つかる、見つける」の問題は、（決める、決まる）のように意志が入っている動作であるため、学習者の6割以上が他動詞を選択している。まずアラビア語には「見つかる」という自動詞がなく、受身の【wujida】（見つけられる）で自動詞文を表現できるが、それは文語的表現であり、実際の日常会話ではあまり使わないため、思い

つきにくい。

6. まとめ

アラビア語を母語とする日本語学習者における自他の習得過程は2つに分けられると考えられる。①形によるものと、②両言語における自他の使用状況の違いによるものである。

①は母語に関係なく、覚えるためのルールがない自他の形を覚えるために学習者が自分で作るルールによるものだということが、学習者のコメントやフォローアップインタビューで分かった。学習者が動詞の自他を別々に学習し、別々に覚えることによって形を間違える。しかし、学習者の日本語能力が上がるとともに、自他の混同が減ることが調査の結果で明らかになった。学習者のレベルが上がるとともに、日本語の単語のレパートリーが豊かになり、学習者が自他をペアとして覚えるようになる。そのため、ある段階で、自他をペアとして教えることが効果的なのではないかと考えられ、日本語教育現場への提案として挙げられる。

②は学習者の誤用と学習者の母語であるアラビア語との関係がはっきり見える。アラビア語では自動詞を使用するが、日本語では他動詞を使用する、あるいはその逆の自他の選択基準が、日本語母語話者と違うことによって生じるものである。責任や失敗を表すときに日本語では他動詞を使用する傾向にあるが、アラビア語では自動詞を使用するものがある。また、事態の成立に注目するとき、日本語では動作主的意思によるものであっても自動詞を使用するが、アラビア語では動作主的意思によるものであれば、他動詞を使用するものがある。

自他動詞を教える立場にある日本語教師は自他を教える際に、アラビア語と日本語における使用状況の違いを把握したうえで授業を行い、学習者にその違いを気付かせることが自他動詞の指導方法における提案として挙げられる。

今後、学習者の日本語能力が上達するにつれて、学習者の自他の選択はどのように変化するかということや、それに関連するアラビア語の正の転移についても考察を深めていきたい。

【参考文献】

- 石川守(1991)「自動詞と他動詞の用法について—‘人の視点’と‘物の視点’に関して—」
『語学研究』64 拓殖大学語学研究所
- 稲葉みどり(2004)「日本語初級・中級レベルに見られる文法的誤り」『教養と教育』, 4
号 PP. 45-56
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- ハッサン, エバ(2011)「エジプトアラビア語における動作主の脱焦点化について」『一般
言語学論叢』第14号, 65-89, つくば: 筑波一般言語学研究会

守屋三千代 (1994) 「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に」『講座日本語教育』第 29 分冊, 早稲田大学日本語研究教育センター, pp.151-165

羅菲 (2011) 「日本語の自他動詞の区別に関する対照分析と質問紙調査—中国人学習者を対象として—」宮城教育大学大学院教育学研究科国際理解教育研究センター

Lado, R. (1957) *Linguistics across cultures : applied linguistics for language teachers.*
University of Michigan

Morita Makiko. (2004) *The Acquisition of Japanese Intransitive and Transitive Paired Verbs by English Speaking Learners: Case study at the Australian National University*, 『世界の日本語教育』14, pp.167-192

Muhamad Muhyidin 'Abd al-Hamid. (1980) *Sharḥ Ibn 'Aqīl 'alā Alfīyat Ibn Mālik, Dār al-Turāth Cairo* 『Ibn Malik's Alfya Explained by Ibn Aqil』

< 稿末資料 >

文法テストの例

1. 怪我 (を/が) (治す/治る) ために、1ヶ月間病院に通った。
けが なお なお かげつかんびょういん かよ
2. 古くなったミカンを食べ、お腹 (を/が) (壊した/壊れた)。
 なか こわ こわ
3. 「どうして1ヶ月も休んでいたの?」「病気 (を/が) (して/なって)、入院して
やす びょうき にゅういん
 いました。」
4. 怪我 (を/が) (治す/治る) ために、1ヶ月間病院に通った。
けが なお なお かげつかんびょういん かよ

ⁱ寺村 (1982) では「相対自/他動詞」という用語を用いているが、本論文では用語を統一するため「対のある自他」と表記する。

ⁱⁱ自動詞の中には、語頭に「A」(アラビア語で「ハムザ」と呼ばれる)を付けることで、他動詞化できるものがある。ただし、この方法により他動詞化する場合、元の自動詞における最初の母音は削除される(kharaja の場合、Akharaja でなく Akhrajā とする)。

ⁱⁱⁱ2年生レベルの学習者は『みんなの日本語初級』を終了しており、実際は中級前半である。

^{iv}自動詞と他動詞の相関関係の分類には西尾 (1954)、鈴木 (1972)、寺村 (1982)、などがあるが、それも複雑なので教育現場では、覚えるルールがないと学習者に教えることがほとんどである。